

## りびんぐらいぶず 平成 29 (2017) 年 8 月第 3 号

### 澄淨(ちょうじょう)の構造

#### ご讃題

もしも、世尊よ、わたくしが覺りを得たときに、他のもろもろの世界における衆生達が、无上なる正等覺に向けて心を起こし、わたくしの名を聞いて、淨信の心をもってわたくしを隨念するとして、もし彼等の臨終の時が到来したときに、すなわち心が散乱しないことのために、わたくしが比丘僧団によってとりまかれ恭敬されて(彼等の)面前に立たないようであるならば、その限り、わたくしは無上なる正等覺をさとりません。

(Ref 藤田宏達『新訂 梵文和訳 無量寿經・阿弥陀經』第十八願 法蔵館 P78)

#### はじめに

四月の「澄淨歡喜」で一度取り上げたままあつという間に四ヶ月が過ぎ去ってしまいました。

淨土真宗で「信心一つでお救いに与る」という信心(正依の無量寿經では、至心信樂欲生我國の「信樂」に相当する)をサンスクリット(梵)本にお訪ねすれば「淨信の心」に当たります。

これはどういう概念であってどのようにすれば頂戴できるのかが課題でありました。

#### 信心(澄淨)とは何か

サンスクリット本第十八願に現れる正依の大經第十八願相当部分は、「わたくしの名を聞いて、淨信の心をもってわたくしを隨念するとして」でありました。

「わたくしの名」とは阿弥陀仏の名号であり、正依の大經第十七願文では、十方世界の無量の諸仏方が讚嘆(咨嗟)されることが誓われてありますから、「名を聞いて」とは、成就文で示される如く諸仏方が讚嘆なさる名号を衆生がお聞かせに与ること(=聞名)になります。

その内容は、縷々讚嘆される(=このことを広讚と申します)名号の謂われ(本願成就の物語)をお聞かせに与ることのみならず、衆生が隨念(=お念仏することを略讚と申します)すれば直ちに聞こえて下さるお名号そのものを如来様直々のお喚び声として聞かせて戴くことに亘ります。

実は、親鸞聖人は、「聞」は「信」そのものだ(聞即信)と仰せになりました(Ref『一念多念文意』、註釈版聖典 p678)。

「聞即信」の信には、如来様の方から遙かな昔からお育て下さって、衆生は、そのお姿にたまたま遇うようにして下さっているという意義があり、「聞信」「聞遇」と熟して頂戴するのだと承りました。

ここから「聞名」の「聞」と等しいとおっしゃった「信心」とはどういうものからか( )という「問い」が生まれると同時に、

その「信心」には「聞名」以外に付け加える要素は何もないという非常に重要な「答え」まで賜る

ことになったのでした。

またその訳は、浄土真宗の「信心」は、如来様より本願力廻向された「信心」だからであるということになるのであります。

これは、曾て、畏れ多くも殿試でご論題の「聞信義相」で問者 梯 實圓和上から賜った問いであり、当時、纒々回答申し上げて果たせず、爾来、随分長い間、問答の思案が脳裏を駆け巡っていたことのであります。

次の「浄信の心を以て」という部分が信心を表しています。

これについてはこのように承りました。

即ち、「浄信」に当たるサンスクリット原語は、*prasannacittā* という *pra-* *sad* の過去分詞で「心澄淨」と訳されます。*saṃādhi* (三昧) と一つにして使われたと云われる原語です。

派生的に、*śradhā* (あらゆる宗教に共通)、*śradhā* 等があり、*adhimukti* (信解、勝解) は、対象に向かつてははっきりと了解していく知性的働きに即応することという意味があります。

無量寿経流通分にある「**其有得聞 彼仏名号 歡喜踊躍 乃至一念 当知此人 為得大利**」(Ref『全書』p46)の歡喜は *pra-* *sad* に当たり、「如来会」の「喜愛之心 慈心歡喜」に当たります。

この語は、第一に、「心をしずめる、浄化する、心を澄淨ならしめる」という意味であり、第二の語義が、「喜悅する、満足する」という意味であります。

この二義を合わせて無量寿経の漢訳編集者は「信樂 (願文)」「信心歡喜(本願成就文)」という語を当てられたのだと教わりました。

原語には「信」は含まれていなかったのに無量寿経翻訳編纂者は“信樂”と翻訳したのです。文献学的に原語に忠実ならんとするならば、願文では、「信樂」よりは「澄樂」、成就文では「信心歡喜」よりは、「澄淨歡喜」等とするのが妥当な翻訳態度だったといえるのであります。

### 聞名とその後の修道の関係をどうみるべきか

四月号では、「心が澄むようになること」が大事だ」として、体験的世界の出来事をご紹介しましたが、よくよく考えてみますとこれには実は注意が必要だということが云えそうです。

因みに周利槃特は、覚えの悪いお弟子様でしたが、「塵を払い、垢を除こう」という御文をお与え下さったお釈迦様のお言葉のままに、称えつつ塵を払う行いを繰り返され、終にお悟り第一のお弟子様におなり遊ばしたのでした。

この逸話を本願力廻向のみ教えを頂戴するための逸話としてご紹介する場合には、次のように頂戴するのがよいようです。即ち、

「塵を払い、垢を除こう」は、称えれば聞こえて下さる周利槃特に与えられた応身の名号の喚び声に相当し、「お釈迦様のお言葉のままに」とは、「浄信の心をもって」に当り、「称えつつ塵を払う行い」は、「隨念」に当たると頂戴するのが穏当だということになります。

「聞名」とその後の「修道」の関係については、龍樹菩薩が『大智度論』のなかで述べられる御文「復(また)次に名を聞くとは、但名を聞くを以てすなはち道を得ざるなり、聞き已って修道して然る

後に度を得る」と述べられるように、ただ聞名のみではさとりを得ることができないことを示して、聞名に基づく修道によってはじめて度脱できる（（Ref 大田利生「浄土三部経に於ける対話表現」『仏教と心理学の接点』p187）は難題であります。これはどう会通すべきでありましょうや。

大智度論という聖道門にも通じる御文ですから、聞名の後の修道が大事だという具合に読めるからであります。

ですが、本願力廻向のお法りを頂戴する上では、「聞名の後の修道」の「後」と言うのは、ただ論理的前後関係を指すのみであって、「聞名」と「修道」に時間的前後関係を見ないものと頂戴すれば宜しいのではないかと窺われるのであります。

これは、先に「聞名ループ」というのは「聞名」「澄淨」「随念」に時間的前後関係を見ない、即の論理で一体化された概念ですとご説明したものに通じます。

「聞即信」「行信不離」の親鸞聖人のみ教えに則したものだからです。

サンスクリット本の願文のうちには聞名と得益の間をつなぐ語が挿入され、以て聞名の内容を知ることができるとして第四十二、四十三願を〇和上はお引きになります。

「有情たちが、わたしの名を聞いて、聞いたことに伴う善根によって覚りの座の極致に至るまで」といい、また、「他のもろもろの仏国にいる有情たちが、私の名を聞いて、それをきいたことにともなう善根によって」とも説かれます。これらによるならば、「名を聞いたことがそのまま善根を修したことになる」（Ref(同前)とお示しだからです。

してみれば、「ともなう」とは、新たなプロセス要素の追加を求めない表現だったのであります。合掌。

(後書き)「聞即信」とは、本願力廻向の「信」には「聞名」以外に改めて付け加えるべき要素がないということの意味しているのであります。合掌。

<p>宗祖七百五十回大遠忌実行委員会八月六日(日)十九時 八月二十日(日)午前十時、歡喜会(盂蘭盆会) &amp; 百回忌の法要 (お客僧) 平野 正信師 著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地 077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥</p>
---